

---

# CHRONICLE SAGA

爵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CHRONICLE SAGA

### 【Zコード】

Z5700A

### 【作者名】

爵

### 【あらすじ】

名を刻まれたものは絶大な力を得る代償として、永久に呪われる運命となる「歴代記」をめぐる物語。

## プロローグ

古の時代、まだ神々が人により近い存在にあった時。

神々は人を愛し、人に神の持つさまざまな力を与えた。

しかしある日、人は欲望に耐えきれなくなり、神から全ての力を奪うべく争いに乗り出す。

神と人との戦乱の後、勝利した神は人のもつ力のほとんどを取り上げ、それのある歴代記に封印した。

「この歴代記は神の力を持つ書なり。この歴代記に名を刻みし者は、神の力を手に入れる代償として、永久に呪われる運命にある。」

神はそう言い残し、その歴代記を大地のどこかへ封印し、天へと去つていった。

人々は何世紀にも渡り、その歴代記を探し続けてきた。

時は流れ、歴代記の話はやがて伝説となり、神話となつた。

歴代記を奇跡的に見つけ、自らの名を刻み付けた者は数人いたが、皆力を得る代わりに呪いにより苦悩の中死んでいった。

神々は天より歴代記の存在を見、やがて決意した。

歴代記を永久にこの世から消そう、と。人間達より取り上げた力を永久に大地より追放し、過去の過ちを無に還そう、と。

歴代記をこの世から永久に追放出来る者は、歴代記に名を刻まれな

がらも呪いに打ち勝てる精神の持ち主しかいない。

神々は全ての希望をある一人の人間に託し、その名を刻み付けた。

伝説の歯車が今回こうとしていた。

夜の帳が静かに降り、青白い満月が姿を現わした。どこまでも続く森の中、いつもならば流れるような心地よい静寂が保たれているこの場所に、今日はやけに緊迫した雰囲気が立ちこめている。

ルシア王国北西部国境付近。森に囲まれたこの地の、やうに国境に近い所に位置するセグレ砦。

普段はほんの数人の国境警備兵しかいないこの砦だが、今夜は少し様子が違つた。

「兵士達がずいぶんと静かだが…」

ソファーに座り、自らの剣を磨きながらリヴィアースが呟いた。

「やはり氣負いしているようだったか？エクトール」

エクトールと呼ばれた、蒼い髪をもつ男が壁に寄り掛かりながらリヴィアースの方へ向き直る。

「そりやそーだよ。久々の戦闘だしな。しかも攻める場所が神殿とあつちやなあー。」

窓から風が入り、暖炉の火がゆらりと舞う。

その火よりもさらに紅い燃えるような色をしたリヴィアースの髪も風で少しおびいでいる。

ルシア王国第一席将軍、24歳という若さにしてすでに数々の戦闘を生き抜いていることから別名“死神將軍”的名で知られているリヴィアースは、いつも増して厳しい顔をしていた。

父であるルシア王国元首ロイドから大至急ニルヴェルフィア神殿へ赴けと言われたのは、もう3日も前の事である。

ニルヴェルフィア神殿とはセグレ砦の少し東に位置し、かつてこの大地を平和へと導いた英雄の一人であるルシアンが祭られている神

殿である。

『あの神聖な神殿を、最近賊どもがアジトにしているらしく。直ちに赴き討伐せよ。』

王宮の王の間でロイドは淡々とそう言い放つた。その口は、リヴァースへの憎しみで溢れている。

リヴァースはもうその父の態度に慣れていた。父ロイドは自分の血、そして母の血を憎んでいた。

『しかし元首殿。神殿は国境付近にあるはずです。国境付近の警備は、確かに第四席将軍の任務に入っているはずではないでしょうか? 何も我が軍でなくとも』

『リヴァース第一席将軍』

ロイドが言葉を遮る。

『そなたもやはり母と同じ血を持つ者だな。…あやつがわしに反抗する時と、同じ田をしておるわ。お前と同じ紅い田で、あやつもわれに食らい付いてくる』

リヴァースはキッと元首ロイドを見た。そうやっていつも我が血を侮辱するのか、貴様は。

王の間を出た後でも、怒りがおさまらなかつたのをよく覚えている。

「…たかが賊」ときに王国一の我が軍を使うとは。あの親父も随分な事をしてくれる

リヴァースは磨いた剣をその場で振り回しながら静かに言い放つた。

「確かに今回の遠征はかなり気にくわねーな

ため息をつきながらエクトールが言つ。

「俺ら准将の間でもかなりその話で盛り上がつた。“王国最強といわれている第一席将軍の軍を辺境に赴かせるのは前代未聞だ”って。特に第一席将軍准将のキースが、最近元首殿がなんか隠し事をしてゐみたいだつつてた。部屋で誰も近付けず、コソコソ何かしてゐらしい。前はそんな事全くなかったのにな。誰も近付けないのは、

せいぜい女と寝るときくらいだったろう……俺も元首殿には何かあると思う」

エクトールの言つとおりだ。リヴァースと乳兄弟のためによく王宮にいて昔から元首のことを見ているエクトールは、その辺の事情をよく知っている。

だとしたら、いつたい何を隠しているんだ？

リヴァースは何か胸騒ぎがするのを感じながらもそれを吹つ切るようになつた。

「……親父が何を隠しているとしても、我々の軍は任務を果たすのみだ」

その時、突然部屋のドアがノックされた。

「何だ」

リヴァースがドアに向かつて言つ。

「第一席将軍リヴァース様、第一席将軍准将エクトール様。そろそろお時間でございます。」

ドアの外から伝達兵の声が聞こえた。

「承知した。行くぞエクトール」

リヴァースは剣を鞘に納め立ち上がつた。彼が身にまとう銀の鎧がガチャリと音をたてる。

エクトールも部屋を出ていくリヴァースの後に続いた。

エクトールは内心、不安を隠せずにいた。

（本当に大丈夫なのか？チクショー！ヤな予感がするぜ……）

この時、まさか本当に予感が的中してしまつとはエクトールは思つても見なかつた。

皆の前には兵士達がすでに列を組んで馬に乗つてゐた。

いつもなら元気のいいこの軍の兵士達だが、戦闘ともなると途端に真剣な面持ちになる。

リヴァースはそんな部下達の表情を目の前で々々に見た。

（やはり戦闘ともなると気が引き締まるな）

松明の燃える音が辺りにパチパチと響いている。

リヴァースは目の前にいる何百人もの兵士達を見渡してから言った。

「今回の目的はニルヴェルフィア神殿をアジトにしている賊の討伐だ！賊とはいえどもいつ命に支障が出るか分からん。気を引き締めてかかるがよい！死んでも剣を離す事は許さん！！！」

ウオオオオオオオオ！！！

兵士達が剣を抜き空に掲げながら一斉に叫ぶ。

「リヴァース将軍万歳！」

「死神將軍万歳！！」

リヴァースはこの瞬間の気の高まりが大好きだった。

「行くぞ！！ニルヴェルフィア神殿へ！！！」

そして兵士達は事前に打ち合せしてあつた通りに、いくつかの部隊に分かれてそれぞれ別々の道を抜けていった。

向かう場所はただ一つ。

ニルヴェルフィア神殿へ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5700a/>

---

CHRONICLE SAGA

2010年11月5日07時38分発行